

特集：2005年度日本数学会出版賞受賞者のことば

楠葉隆徳氏

数年前この『インド数学研究』を出版したとき、同僚から「すごい本ですね。消費税だけで900円もするんですから」と言われました。これからは私が「すごい本でしょ。数学会が表彰してくれたのだから」と言えます。

昨年の10月より一年間の予定でかつて学んだアメリカ・ブラウン大学数学史料科で、『数学の月光』というタイトルのついた、西暦の1356年にナーラーヤナというインド人が書いたサンスクリット数学書の校訂をしています。この数学書は1936年と42年とに分けて出版されましたが、この当時入手できた唯一の写本に基づいています。その後、複数の手写本を見つけたので、今回は異読を整理し、校注を入れながら写本相互の時代的前後関係、依存を把握して伝承を遡って原典により近いものを再構成するという作業をしています。同時に、これに英訳と注釈をつけています。私がブラウン大学で原典編集の訓練を受けたのはもう20年以上も前です。数学史研究とは数学について書いてある文献が、どのような目的を持って書かれたのかを現代的な視点で見ることではなく、原典から調べるのだと思います。数学史にかぎらず、科学史上の原典を編んだり、解読していくのは地道な困難な作業で、内容がよくわからないことも多々あります。編集や翻訳には解釈が入りますが、それでも原典に忠実な訳をつけて資料として残しておく、原典が書かれた言語がわからずもない人も解釈できる可能性があります。『インド数学研究』もそんな資料の一つになればいいのですが、われわれが解釈できなかった箇所もあります。また解釈が異なる箇所もあるかもしれません。それは私たちや次の世代の宿題です。

楠葉隆徳（大阪経済大学人間科学部教授）